野村：ね、星野リゾートに対してもそう。途中でね、止められちゃ困るからと、そればっかり言ってね、断った。それから、UT ホールディングスに対してもそう、途中でやめたら困るからとやってね、断った。その背景にあるのがね、千代田のときね。途中で止められちゃったからね、裁判して、4000 万もね、もらうのに大変だった、みたいなこと言っててね。それがあるからそうなんだ、ということをね、僕は何度か聞いてる。そこまでね、途中で止められると困るっていうことをね、そんざんね、表に出してね、星野リゾートとＵＴホールディングスに断りながらね、なんでＪＲＴに関してはね、その提案した内容をね、ちゃんとやらなかったときのためのね、方策をね、何ら採らないどころかね。買戻しの特約、他のね、町の財産を売買するときにね、買い戻し特約特約に入れることがあるのにね、普通だったらね、買い戻し特約を入れますよ、10 年間でね、提案内容がね、できなかった場合はね、買い戻しをすると。それも入れない。「何で？」と。星野のもね、星野もね、ＵＴホールディングスでもね、そこまでね、しつこくね。言っていながらね、なぜＪＲＴに対しては、一切それがなしでね、手放しちゃったのか。不思議でしょうがないよ、僕は。バランスが取れないよ。

山内：いや、それは、土地が北海道であったということと、町の利益を考えたときに・・・

野村：いやいや。

山内：必要ないって、僕らの話してるんですよ。あなたの考えは言ってませんから。僕らは、そういうふうに考えてやった、ということです。それがおかしいんだったら、どこにでも出てって、何かそういうふうにして、もっと主張すればいいんじゃないすか。（不明）。僕らは、そういうふうにして、手続きを踏んで、何回も言いますけど、手続き踏んで、議会にも説明して、今やっているわけですから。議会に対して陳情書を上げましたけど、その答えは、さっき言ったように、どう返ってくるか、ちょっと、もう少ししたら、多分返ってるんじゃないかなと思いますけど。私、中身全部わかりませんけども、それによって、あなたも、強く私の方に出てくるのか、それとも、議会もそういうふうに納得してるのか、ちょっと僕は、ちょっと僕はわかりませんけど、その推移をもう少しみてください。

野村：僕が言ってるのは、ＵＴホ・・・、あそこまでね、あそこまで途中でやめられたら困る、ということをね、言ってながら、バランスが全く取れてないんですよ。ＪＲＴで、あれ、土地の問題じゃなくてね、買い戻し権の話ですからね、結局ね、あの土地の賃借権ね、当然オーナーはね、オーナーは北海道

ですよ、でも賃借権はね、あんた方のものだったわけですよ、賃借権は。賃借権っていうのはね、リフトの所有権に付随してたわけですよ。

野村：それを売るにあたってね・・・

山内：時間がないから、その話しは別のときにしましょう。

野村：なんで？　そんな、納得いかないよ。僕が言ってるはね、あなたがね、いかにもね、口先だけでね、なんか「癒着はない」「談合はない」みたいなこと言ってるけどもね。そうね、思わざるを得ないのは、「おかしいな」と思わざるを得ないことがあるから言ってるんですよ。納得いかないよ。バランス取れないよ。なんでＪＲＴのときだけはね・・・

山内：それを調べて、証拠でも持ってきてください。

野村：証拠なんか取れないよ、密室の犯罪なんてね。

山内：じゃあ、言わないでください。証拠もないのに、失礼じゃないですか。「あなたが、町民の権利である、いや義務である、ね、しっかりした、納税も、してないみたいだ。そんなふうにして、僕は感じますよ」って言われたら、失礼だと思いませんか？　あなた。

野村：それは失礼ですよ。いま事情があって、払ってないけど、確かに。

山内：いや知りません。私、知らないんですけども。自分の勝手な思いで、私の勝手な思いで、そうやって、あなたに対して言ったら、それ失礼なことでしょう。私、あなたに対する。あなたも資料も証拠もないのに、ＪＲＴとタック組んだとか、ＪＲＴと何かしてるとか・・・

野村：言ってないでしょ。そんなことは。

山内：言ってるから、そういうふうにして、何回も、こういう請求してるわけでしょ。

野村：違う。僕が言ってるのはね、

山内：いや、言ってる。

野村：違う。言ってるのはね、なぜね、なぜ違うんだと。

野村：「黒幕がいる」まで言ったよな。

山内：一番最初に、前回、そこの上の部屋で会ってるとき、あなたは悪くないかもしれない、「黒幕がいるんだ」って、いうそういう言い方もしてましたよ。

野村：ね、そこはね、あなたをね、多少おもんぱかってね、僕は言ったつもりだった。あとで、考え方、変えたけどね。あなたを、おもんぱかって言ったつもりだったけどね。ちょっと考え方を変えましたよ。

山内：黒幕ってどういうことですか？　黒幕からしたら、僕らは、したら何なんですか？

野村：それは、僕はね、撤回しませんでしたか？　「これは確かに言葉に語弊がありました」と。「今の言葉を撤回します」と、正式にね。

野村：思ったから、言ったんでしょ？

野村：違う。僕はね、正式に言いませんでした。「撤回します」と。

山内：撤回すれば、じゃ何言ってもいい・・・

山内：でも、僕は言いませんでした？　「撤回します」と。

山内：言ったかもしれない。

野村：「言葉が不適切でした」と・・・

山内：あまりにも失礼ですからね、撤回すべきですからね。

野村：だから言いましたよね。結果しますと。

山内：言ったと思いますよ。

野村：それをね、撤回したことはね・・・

山内：そうですね

野村：そんなこと言い出したら・・・

山内：だから、こうゆう風にして、文書開示してる・・・

野村：あのね、あのね、もうちょっと紳士的に話しませんか？　人様にはね、ね。ね、ちゃんと理路整然としたね、思い込みだとか、じゃなくてね、根拠だとかね、事実に基づいてね、論理的に話をしなければいけないわけですよ。

山内：（不明）

野村：話してる。話してる。ねの中にはね、言い間違えたりねすることもありますよ。それはね、ちゃんと正式に謝ったり、撤回したりすることによってね、本筋に戻すことができるものなんですよ。良くないのは・・・

山内：（不明）。

野村：話してる。話してる。良くないのはね、それをダラダラ流してしまうのは、良くない。

野村：ただ、それが、自分が、あなたがね、正にね、それは自分がね「見てなかった」とね、第三者委員会から出たものに対してね、「見てなかった」と、あれはね、紳士的な対応であってね、ああいう、そういうふうにすべきなんですよ。僕が撤回してることをね、撤回してることをね、また、あたかもそれがね、１回言ってしまったものはね、決してね、覆らないことであるかのようにね、徹底してやること自体はね、フェアじゃないよ。